

## **文部科学省の科学技術政策の今後の方向性の検討に当たって 特に議論が必要な論点 (案)**

### 前提となる背景

- 研究成果が社会実装へと至るまでの知の移転サイクルが加速し、人々の生き方や価値観も多様化するとともに、社会像も必ずしも一つではない。こうした社会の変化に合わせ、科学技術システムもまた、柔軟性と変化に耐える力を持つことが重要となっている。
- ターゲットイヤー（目標年）については、次の科学技術基本計画の期間（2021年～2026年）を基本とするが、上記背景を鑑みると、100年先（2121年）、15年先（2036年）を見据えた長期的な視点を持つことは非常に難しい。社会の変化に合わせて柔軟かつ即時的に対応できる計画が必要となってくる。

(※1) なお、本検討を行う際には定量的なエビデンスとともに、絶えず変化している状況に対応するため、第一線で率直な声（現場のエビデンス）を聴くことが求められている。

✓ **グローバル化が浸透している一方、自国第一主義が台頭している中、持続可能な開発目標（SDGs など）への科学技術イノベーションの貢献が求められている。また、社会ではバーチャルとリアルの融合（Society 5.0 など）が進む中、データ・技術覇権争いも起こっている。今後訪れる社会的変化は何か。**

✓ **日本の科学技術システムについて、何を目指しどうすべきか。また、文部科学省はどのような役割を果たすべきか。それらの検討の際、単一のシステムではなく、多種多様な研究開発・イノベーションに各々最適化したシステムが必要ではないか。その際、文部科学省としてイノベーションのどの部分までを役割として担うべきか。**

- 人間の可能性を拡張、人間の幸福を実現するような（Human-centric<sup>※2</sup>な）科学技術をより一層進めるべきではないか。
- 一つのクリティカルな発見がイノベーションをもたらす一点突破型のイノベーション、複数の研究開発成果を組み合わせることによってもたらされるイノベーションなど、様々な様態に最適なシステムの構築が必要なのではないか。

(※2) 人間中心（AI が人間の身体的な欠損を補うなど）。AI 研究の議論においてよく用いられる言葉であるが、科学技術政策全般に適用できる言葉ではないため、今後精査予定。

- ✓ **新たな発想を生み出し破壊的イノベーションの源泉である基礎研究こそが科学技術創造立国を標榜する我が国としての力の源泉ではないか。**
  
- ✓ **複雑化、多様化する社会課題を抽出し、その解決を出発点としたバックキャスト型の視点を研究開発にどう取り入れるか。目指すべき社会像も一つではなく、また見通すことが難しくなっている今、バックキャストの在り方とはどういうものか。**
  
- ✓ **科学技術による新たな価値の創造の担い手である人材の養成・供給が重要ではないか。特に、文理融合をはじめ、柔軟性を持ち、あらゆる変化に耐え得る力を持った人材が求められているのではないか。**
  
- ✓ **その他、特に議論が必要な論点**